

概要

- 安芸高田市は、販売農家13戸、ハウス面積4.2ha、**令和2年度のグループ販売額は8400万円**の県内唯一のチンゲンサイ産地。販売額1億4700万円を目指しており、出荷量の増加が課題となっている。
- このため普及指導所は**栽培技術の平準化、土壌病虫害対策の導入**、産地の核となる**常時雇用可能な経営体の育成**を支援した。
- その結果、令和5年度にはチンゲンサイ**1億円産地**として育成された。

具体的な成果

1 土壌消毒の普及による病虫害対策

- 土壌消毒への理解と評価が得られ、土壌消毒を実施する生産者が増加した。
土壌消毒取組農家数：1戸（令和2年）→6戸（令和5年）

2 JGAP団体認証取得

- **6戸の生産者がJGAP団体認証を取得**した。
- 栽培方法や農場の現状について**グループとしての共通認識**を作ることが出来た。
- 圃場の整理整頓ができ、衛生意識が向上した。
- **栽培記録が習慣化**した。
- 令和5年度は**グループ販売額1億円**を達成した。

3 常時雇用が可能な経営体の育成

- 目指す姿から逆算した数値目標設定することで、**生産者の経営改善意欲が高まった**。
- 記録を行うことで**データに基づく栽培・経営**が行えるようになった。
- 栽培計画に基づく栽培で回転数と売上が増加した。

①回転数 5.5→6.0

②生産量・売上：前年対比10%増加



生産者との振り返りの様子

普及指導員の活動

令和3年度

- **JGAPの説明会**を実施した。
- 県主催のひろしま農業経営者学校チャレンジ・実践コースをM氏に受講してもらい、**10年後の経営について考えてもらう**。

令和4年度

- フスマを用いた**土壌還元消毒の展示図**を実施した。
- 全農・県農業技術課とともに**JGAPに関する研修と圃場巡回**を実施。前段階として**産地版BCP**を作成。
- M氏に**グーグルスプレッドシートを用いた栽培記録**を行ってもらい、その記録と決算書をもとに**現状分析と目標設定**を行う。

令和5年

- 糖含有珪藻土資材を用いた土壌還元消毒の提案を行った。
- 全農から講師を招き、JGAP団体認証取得に向け、**関係機関と連携しながら支援**。
- **生産計画を作成**し、3～4か月ごとにM氏と振り返り、**生産の予実管理と収益効果の確認**を行った。

普及指導員だからできたこと

- ・ GAPの取組について、JA、全農、県農業技術課などの関係機関と連携し、現地に沿った対応が出来ている。
- ・ 担い手の個別の状況に応じた経営発展支援を行うことが出来た。

広島県

多様な経営体の集まるチンゲンサイ産地の育成と発展

活動期間：令和3年～継続中

1. 取組の背景

JA ひろしま広島北部野菜生産部会チンゲンサイグループは、安芸高田市を中心に生産者13名が、4.2haのハウスでチンゲンサイを生産している。生産者の過半数が40代以下と比較的若いグループである。令和2年のグループ販売額が8,900万円であり、販売額1億4700万円を目指している。

販売額を増やすには出荷量の増加が必要であるため、産地全体の課題である土壌病害虫対策、生産者間でばらつきのある栽培技術の平準化と産地の核となる常時雇用可能な経営体の育成を行うこととした。

リゾクトニアやネコブセンチュウなどの土壌病害虫の対策には土壌消毒が有効であるが、産地では行う習慣がなかった。そこで、展示圃等を活用し、生産者に技術の有効性を理解してもらい、技術の普及を目指した。

栽培技術平準化についてはGAP認証の栽培記録を活用することとした。認証取得することで産地の信頼性が向上し、販路が拡大することや災害やイレギュラーに強い産地への育成も期待されている。個別認証ではなく、団体認証にすることでグループ内の記録様式が統一されることも栽培技術平準化の一助になると考えられる。

当グループは売上額1,000万円程度の家族経営体が多い。経営体数を大幅に増やすことは現在の世情から難しいため、1経営体当たりの売上が増える常時雇用可能な経営体の育成を目指した。令和5年度に親との経営統合と雇用導入による経営発展を目指しているM氏を選定し、経営体の現状に寄り添ってデータに基づく経営発展支援を行うこととした。

2. 活動内容（詳細）

（1）土壌消毒の普及による病害虫対策

ア フスマを用いた土壌還元消毒の提案（令和3年～4年）

令和3年度と令和4年度は、リゾクトニアやネコブセンチュウによる減収が多かった生産者の圃場でフスマを用いた土壌還元消毒の実証展示圃を設置した。収量および病害虫発生状況調査を行い防除効果検証と導入経費や労力について周知を図った。

イ 糖含有珪藻土資材を用いた土壌還元消毒の提案（令和5年）

令和5年度は、ネコブセンチュウ防除と土壌消毒の習慣化を期待し、経費面から普及は難しい資材ではあるが深層部まで消毒可能な糖含有珪藻土資材を用いた土壌消毒試験を実施した。

（2）グループ内での栽培記録の見える化による課題抽出と栽培技術平準化

ア J G A P 団体認証の検討（令和3年～4年）

令和3年度から定例会に全農や県農業技術課を招き、産地としてGAPに

取り組むか検討を開始した。令和4年度は各生産者がGAP認証の具体的なイメージを持てるよう各圃場で模擬審査を実施した。グループ定例会前にはJA、全農、農業技術課、指導所の関係機関が集まり、課題やスケジュールを共有し、推進方針を確認しながら進めた。また、GAPの前段階として産地版BCPを作成した。

イ JGAP団体認証の取得

令和5年度4月に産地でGAPに取り組む最終的な判断をし、令和6年2月のJGAP団体認証取得に向けて活動を行った。関係機関での取組方針検討会議、事務局会議の開催、定例会でのGAP研修、整理整頓を推進するための圃場巡回、帳票類確認、模擬内部監査などを支援した。

(3) 常時雇用が可能な経営体の育成（令和3年～5年）

令和3年度は、M氏にひろしま農業経営者学校チャレンジ・実践コースを紹介し、講座の中で10年後の経営について考えてもらった。

令和4年度は、経営主にスプレッドシートを用いた栽培記録に取り組んでもらった。栽培記録と決算データ、出荷データを用い、親の経営も含めた経営の現状分析と10年後のなりたい姿から逆算した数値目標の設定を行った。現状と目標のギャップから、経営統合しても雇用を導入するには売上高が不足しており、また作業時間あたりの売上高も高める必要があることが明らかとなった。そこで、①ハウスの回転数の向上および日出荷量最大化と継続による売上高の向上 ②作業の効率化による作業時間あたりの売上高向上に取り組むこととした。一度に2つに課題に取り組むことは困難であったため、まずは①のみに取り組んだ。栽培記録から回転数を増やすことは可能と判断し、また1日あたりの出荷数量も日によって多寡があったので、ハウスの無作付け日数を短くし回転数を増加させることと、1日あたりの目標出荷量達成を両立する年間生産計画の作成を経営主と一緒に行った。

令和5年度は3～4ヵ月毎に経営主と生産計画の振り返りを行い、生産の予実管理と収益効果について確認した。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 土壌消毒の普及による病害虫対策

フスマを用いた土壌還元消毒は、リゾクトニア及びネコブセンチュウに対する抑制効果があり、生産者所感ではあるが、病害虫対策だけでなく湛水により土壌水分が均一化され、チンゲンサイの発芽や生育が揃うなど一定の評価が得られ、土壌消毒を実施する生産者が1戸（令和2年）から6戸（令和5年）に増加した。複数年連続して消毒を行っている生産者もあり、土壌消毒が習慣化しつつある。

(2) グループ内での栽培記録の見える化による課題抽出と栽培技術平準化

令和6年2月に6戸の生産者がJGAP団体認証を取得した。リスク評価や必要書類の作成にあたり、各々の栽培方法・農場の現状について話すことで、グループとしての共通認識を作る良い機会になった。これをきっかけに生産者同士の情報交換も盛んになった。また、圃場の整理整頓や衛生意識の

向上だけでなく、栽培記録も習慣化した。

(3) 常時雇用が可能な経営体の育成

10年後の目指す姿から逆算した数値目標の設定によって、生産者の経営改善意欲が高まった。また、データに基づいて活動、分析が行えるため、振り返りが簡単に行えた。

令和4年度と令和5年度の1日当たりの出荷量を比較すると、平均が増加し、少量収穫を行う日が大幅に減少した。1日の作業量を増やすことが出来た。さらに、回転数が5.5から6に増加し、令和5年度の生産量、売上ともに前年から10%増加した。これにより雇用労賃が支払える売上水準に近づきつつある。

4. 農家等からの評価・コメント（安芸高田市 M 氏）

JGAPの活動を通して、圃場の整理整頓のレベルがグループ全体で高くなったように感じる。また、リスク評価等で生産者同士が意見を出し合うことが出来たことが良かった。土壌消毒の展示圃から適する圃場の条件が明確になり、効果も実感することが出来たため、これからも継続して取り組みたい。経営発展支援を通じてデータに基づく分析を行うことで経営に関する意識が高くなり、日々の作業の中でも改善したい点が頻繁に見つかるようになった。常時雇用を目指して自分から進んで行動していきたい。

5. 普及指導員のコメント（西部農業技術指導所・技師・前川智子）

入庁して初めて担当した生産者グループであったので、農業の基礎から生産者との接し方まで幅広いことを教えていただいた。若い世代の多い産地であるため、勢いを持ってBCPやGAP等の新しいことへのチャレンジが出来ている。グループである利点を生かし、より持続力のあるグループへの発展を期待している。

6. 現状・今後の展開等

(1) 土壌消毒の普及による病害虫対策

土壌消毒が普及したことにより、土壌病害虫の発生は以前より低減している。引き続き、より一層の土壌消毒の普及に努める。

(2) グループ内での栽培記録の見える化による課題抽出と栽培技術平準化

栽培技術の平準化のためにGAPの取組の継続・活用するには生産者の中でGAP担当を作るなど、生産者自身が栽培方法や栽培環境を改善できる仕組み作りが必要である。そのために、産地ビジョンの作成を通じてグループとしての団結力を高め、グループ体制の革新を行う。

(3) 常時雇用が可能な経営体の育成

回転数の上昇には引き続き取り組みつつ、次の課題である作業の効率化による作業時間あたりの売上高向上に向けて作業ごとの労働時間の記録を付け、省力化できる作業がないか検討する。また、同手法を他の生産者に拡大し、経営力のある担い手を増加させる。